



こんにちは。私は精霊です。センダンの精霊です。センダンの木の精霊です。

私は古座川というところで明治のころに生まれました。人間の年で数えると、150歳位でしょう。ものすごく長寿のようですが、精霊の世界では赤ちゃんです。

古座川の下流で、自分で言うのもなんですが、美しい並木を作っています。センダンとか、古座川とか、一体なんですか、どこですか。この話の落ちは？あわてないで下さい。この質問にはあとで詳しくお答えしましょう。

まずは、私の生い立ちから始めましょう。少し、難しいので、大人の人と一緒に読んでください。

和歌山県の南部、紀伊半島の南部に古座川といわれる地域があります。

時代は明治から始まります。

今の古座川町高池地区で、江戸期から一万町歩の土地を有していたのが佐藤家でした。佐藤家は古座川界隈の製炭業を一手に引き受けた大商家でした。明治時代には、佐藤家の一人、長衛右門

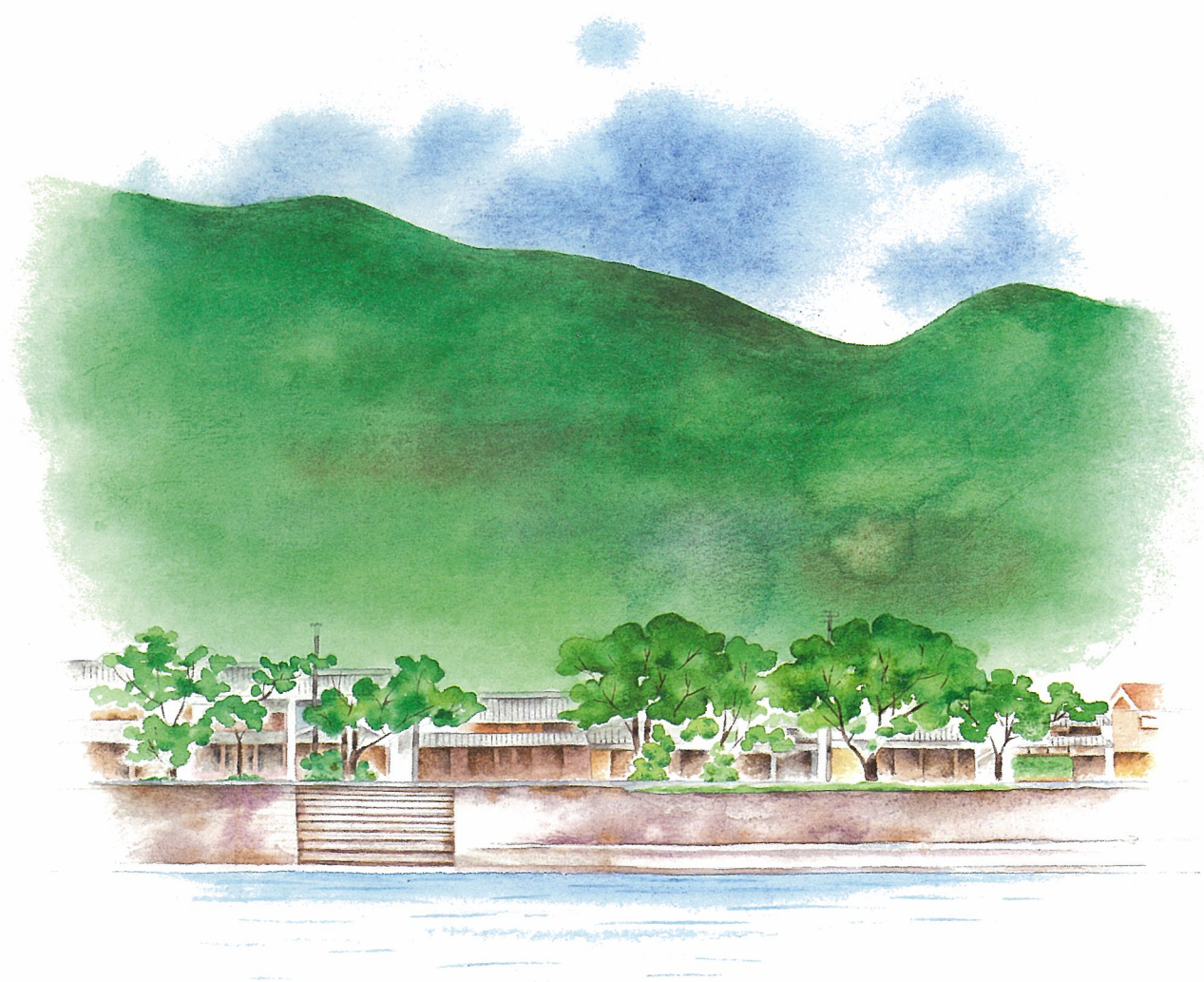
活躍、貴族議員に選ばれたほどでした。土地のほんのごく一部が今の古座川町役場の敷地でした。紀州が誇る大博物学者南方熊楠と親交のあった佐藤虎次郎は長衛右門の養子でした。

ある年、知識欲が旺盛な佐藤長衛右門が旅行先の九州で珍木を見つけて頗る気に入り、その苗を買い付けました。というのも、古座川にはない樹木だったからです。購入した苗を、古座川河岸に移植しました。すでにお分りの通り、木の種類はセンダンでした。成長の早いセンダン、つまり、私は屋敷地で見る見るうちに大きくなりました。

時代が流れ、佐藤家は大敷地の一部を役場に譲渡し、1967年（昭和42年）に古座川町役場庁舎が建設されました。

生育旺盛なセンダンは時に剪定を受けながら更に更に大きくなっていきました。

旧古座街道のセンダン並木は今では立派に成長していますし、夏は木陰を作ってくれます。秋から冬、私は落ち葉を大量に落とすので、少し迷惑がられていますけれども。





私が古座川の岸辺で成長していった明治から昭和半ばにかけて、流域では様々な暮らしが営まれ、林業、農業、漁業が盛んでした。人口も1万人を軽く突破していました。

古座川の山々では、葉が広くて表面に光沢がある照葉樹林を相手に、大勢の炭焼き職人が山の炭焼き小屋に寝泊りして炭焼きを行っていました。今は燃料と言えば、ガスや電気、石油ですが、昔は炭が基本でした。完成した炭は、川を舟で下って河口の取引所まで運搬されていました。逆に、色々な生活物資や産業資材を満載した舟や筏が古座川を上っていきました。九龍などの難所では、馬が引っ張ることもありました。

熊野地方は鉱山が多く、古座川でも銅鉱山があちこちにありました。今でも採掘した跡があります。この採掘のため、全国から鉱山職人が大勢集まったのです。

春にはワラビなどの山菜が、秋には手入れされた松林から薫り高いマツタケが採取されました。水田では牛による3月の代掻きのあと、田植え、草取り、土用干し、そして11月には稲が収穫されました。田の水口には独特の香りがする香り米がありました。ハッチョウトンボが飛び交い、カエルがなき、色々な昆虫、色々な植物たちで賑わっていました。一部の水田では、オオウナギやスッポンも取れました。春先には、私の一部である葉や枝を田に敷きこみ、肥料としていました。センダムには虫下しなどの薬効もあり、寄生虫対策にもなっていたかもしれません。

島では様々な野菜のほか、アワ、ヒエ、キビなどの雑穀が栽培されていました。里川では、鰻、亀類、エビ、カニ、貝類、魚類などが漁獲され、重要な蛋白源でした。しかし、なんといっても代表的なものはアユでした。尺アユとよばれる30cmを超えるものがウジャウジャ棲息し、清流古座川の一大風物詩となっていたのです。



トントン釣り



筐たて漁

古座川ではアユ漁が盛んです。アユの釣り師達が川に立って竿を伸ばしている光景をよく見かけます。いわゆる友釣りというやり方です。アユはなわばりをもち、そのなわばりに入る他のアユを追い出そうとします。その攻撃習性を利用します。わざとおとり用のアユを入れ込み、攻撃してきたアユを釣り上げるのです。しかし、アユは頭が良いので、簡単には引っかけられません。まさに真剣勝負です。しかし、それ以外にも色々な漁法があります。

支流の小川の滝の畔ではアユの「トントン釣り」が行われます。付近のおばさんも釣ります。どんな釣りでしょうか。アユに限らず、魚やエビなどは上流に行こうという習性があります。滝の畔ではボウズハゼが腹の吸盤で滝登りします。エビも滝の苔を使って登って行きます。アユもそうです。いつもは頭の良いアユが滝登りしている時は色々考える余裕がなくなります。そこを狙って引っかけ上げるのです。岩に釣り針がトントンと当たるので、この漁法の名前があります。

この小川から本流で広く行われている漁法に「筐たて漁」があります。産卵のために下流にアユが向かう「落ちアユ」の時期に、筐や竹を切り出し

適当な川の位置を定め、こちら側から対岸に一列

に竹や笹を並べます。その間隔はアユが嫌がるようにしておきます。下流に向かうアユは目がよく前方の障害物があると、いったんブレーキをかけます。この瞬間を狙って網を打つのです。一網打尽とはいきません。アユは頭が良く、網と川底の隙間を狙って逃げることもしばしばです。

本流中流域では、「火振り漁」も落ちアユの頃行われます。夜間、ゆらゆら揺れる松明に驚いてアユが逃げ回り、あらかじめ仕掛けた網に引っ掛かります。そのアユを捕まえるのです。

判断力が低下するところを狙うという意味では、河口で行われる「濁りかき漁」はよく似ています。大雨で川が濁るときがあります。アユは先が見えなくなり、前方にある網を回避できません。そこを掬い取るやり方です。

すべては、人が清流とアユとともに生きてきた文化です。

また、河口では、質のよいアオノリが秋から翌年の春にかけて大量に取れ、天日干しされていました。その風景も季節の一大風物詩でした。

次のページには、センダンが選んだ古座川の見所を紹介しましょうね。



火振り漁



濁りかき漁



アオノリ漁

滝の拝

古座川支流、小川に滝の拝という名勝地があります。熊野層群が特殊な浸食を受けて成立した滝地形の1種です。周辺には亀穴があります。川のくぼんだところに石がやってきて石がその場で回転し続けて穴を掘っていきます。洪水などで石ころは滝の下に流されてしましますが、再び上流から石がやって来て穴拡大作業を引き継ぎます。こうしてできるのが亀穴です。私のようなセンダンの精霊でも気の遠くなるような時間がかかります。地形というのは形によらず大変に貴重な財産なのです。オオサンショウオや腹の吸盤で滝登りするボウズハゼもいます。

小川

古座川の支流に小川というのがあります。小川と書いて、「こがわ」と読みます。素晴らしい清流です。地元では、「小川（こがわ）」と書いて、「おがわ」と呼ぶらしいけどな」という会話が聞かれますが。しかし、よく考えてみると、「小」という字は「こ」と普通は読みますので、「こがわ」と読むほうが基本的なのかも知れません。高知県の淀川上流には、小川地区があり、そこを流れているのは小川川（こがわがわ）と言います。やはり清流です。

センダンおすすめの

古座川の見所

大塔山

ヤナギタデ

古座川や小川の河原のいたるところに生えている夏の草です。蕎麦と同じタデ科植物です。葉の細胞が独特な化学成分を含んでいて、食べるとうるしな辛味となります。葉をすりつぶして塩や酢で調味すると、アユ料理には欠かせない「タデ酢」となります。古座川の人々はアユは塩焼きが一番と口をそろえて言います。ここが、食文化の面白いところです。葉は柿の渋抜きにも使います。ヤナギタデのある川岸は水生動物の宝庫です。甘辛く炊くと美味しいエビたちもわんさかすんでいます。

一枚岩

古座川中流にある奇岩です。初めて見る人は誰もが驚きの声をあげます。古くは大岩と呼ばれていました。1000万年以上前のマグマ活動が作った地形で、弧状岩脈と言います。深さ20-30kmのプレート境界まで続いている可能性があり、そうだとすると、基礎工事はばっちりです。絶壁の表面には今では希少な植物や動物が難を逃れて生活して

います。菌類とコケ類の共生生物、地衣類も張り付いており、なかでも、ヘリトリゴケという地衣類は、大きさが1.8mに達します。世界最大です。屋久島縄文杉クラスです。2000歳くらいだと推定されます。ちなみに、一枚岩から河口付近までの部分も弧状岩脈の浸食跡です。中国の桂林そっくりです。





古座川は洪水の多い川でした。明治時代から何度も洪水に見舞われました。センドン並木は洪水時に、木材が流れないように網でつなぎとめておく頑丈な木として重宝がられました。洪水の原因は色々ですが、ひとつは山林火災です。山の木や落ち葉が少なくなると降った雨がすぐに川に流れてしまいます。

古座川の治水にもダム工法は最善であるという決定が第2次世界大戦後になされ、1956年（昭和31年）に古座川本流中流域に七川ダムが完成したのです。完成後、洪水は減少しましたが、すべてを防ぐことはできませんでした。当時、電化、電化の時代だったので七川ダムに発電機を付けたのが失敗の一原因でした。洪水対策には、日ごろダム湖の水位をできるだけ下げておくのがよいのですが、発電にはダム湖の水位をあげておくのいいことになります。ジレンマです。電気が洪水対策か。でも、当時は前者が優先されたことになります。



1945年（昭和20年）代の中流域



2004年（平成16年）の中流域

日本は戦前から車が普及し始めました。古座川でも河岸沿いの自動車道路が発達していきました。

戦後の開発の結果、生活は便利となり、観光客も上流まで入りやすくなりました。しかし、上流まで普通に登れた魚や小動物たちがダムまでしか登れなくなりました。また、川岸にすんでいた生物も、道路建設によってすめなくなりました。

ダムができた後、河原を洗っていた水が少なくなり、玉砂利の間の粘土や砂がその場に溜まるようになりました。その結果、水生昆虫がすみにくくなり、一方栄養満点になった河原には、ツルヨシなどの高窒素性植物が占拠するようになりました。景観がすっかり変わっていったのです。1960年（昭和35年）代以降のことです。

戦後の古座川はまさに激変の歴史でした。

さて、古座川流域の歴史を簡単に見てきました。

センダン並木の仲間にある不幸が起こりました。

古座川役場庁舎のすぐそばのセンダンが、徐々に川に向かって倒れ始めたのです。大変危険な状態です。以前の町長であった広瀬征彦さんはもう少し辛抱してやろうということで伐採を延期していたのですが、後継の奥根公平さんは決断し、可愛そうだけれども伐採もやむなしということになりました。伐採は2005年(平成17年)の7月初旬、雨の中で行われました。生きたセンダンの仲間をまた一株失いました。人にとつての安全確保も大事ですよね。

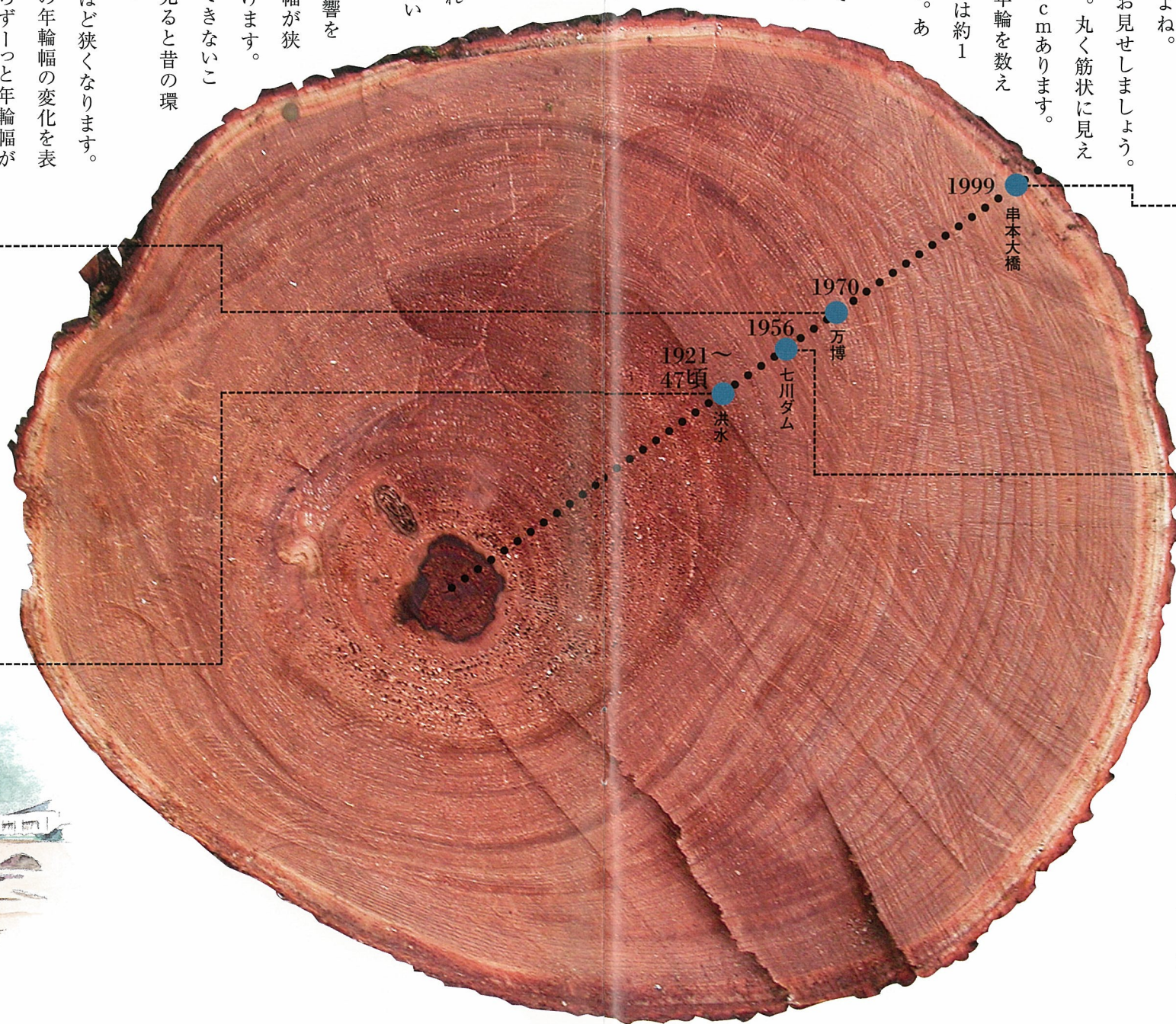
伐採されたセンダンの輪切りをお見せしましょう。まるでバウムクーヘンのようなですね。丸く筋状に見えるのが年輪です。実物は直径が約67cmあります。年輪は一年でひとつ増えるので、年輪を数えると年齢が分かります。この輪切りは約150歳となります。明治生まれです。あなたよりも大先輩ですね。

特に戦後のイベントを年輪に当てておきます。懐かしいでしょう。七川ダム建設もあげておきましょう。ここで、樹木の年輪の勉強をしておきましょう。

年輪は、成長の良い時期(日本では夏)と悪い時期(日本では冬)を交互に経験することで形成されます。成長が早いと色が薄く、遅いと色が濃くなるからです。

年輪は種類だけでなく環境の影響を受けます。土が痩せていると年輪幅が狭くなりますし、気温の影響も受けます。北方では寒い夏が続くと年輪ができにくいこともあります。つまり、年輪幅を見ると昔の環境がどうだったかが分かるのです。

また、年輪幅は樹木が年をとるほど狭くなります。さて、ここで伐採されたセンダンの年輪幅の変化を表すグラフを見てください。明治からずっと年輪幅が0.5mm位だったのに、約45年前の1960年(昭和35年)代から年間1mmに増加、更に年輪幅が増加していきます。1980年(昭和55年)ごろには年輪幅が20mmを超えます。どうしたのでしょうか。年をとればとるほど、年輪幅が減少していくのが当たり前なのに。どうしておかしな年輪が残ったのでしょうか？これが古座川センダン精霊ネットワークの最大の謎なのです。



● 串本大橋開通



● 七川ダムの完成



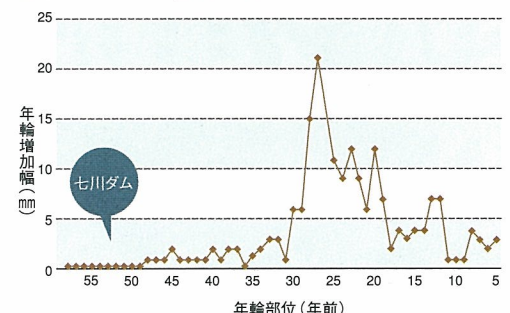
● 大阪で万博開催



● ダム建設まで洪水多発



● センダン部位別年輪増加幅





長老センドンのつばやき

里域さとみちという言葉があります。

人間が生活に必要なものをもらいながら他の生物や存在と持続的に共生している空間のことです。里海さとみ、里地さとち、里川さとがわ、里山さとやま、里空さとぞらなどから成り立っています。

古座川流域では、センドンは里域、とくに里川沿いに生えています。

さて、年輪幅はその樹木の立地環境の影響を直接受けます。センドンの場合も同様です。

今回伐採されたセンドンの輪切りから見つかった異常な年輪パターン。これは何を意味するのでしょうか。

川岸に生えるセンドンは川の水の影響を受けてきたはずです。

水質はどう変わったのか。何が原因でしょうか。

戦後、古座川流域では、他の地方と同様、開発、開発の繰り返しでした。そして人々の生活は豊かで便利になりました。その一方で色々なものも失いました。

21世紀は20世紀までの苦い経験を教訓とすべき時代なのです。

センドンの輪切りは将来とるべき方向を指し示しているのです。

ここで、いいニュースがあります。

伐採されたセンドンが息を吹き返したのです。

株元かぶもとから新芽が出始めたのです。生命の神秘です。素晴らしいことです。

今度のセンドンが正常な年輪幅を刻むような21世紀になってほしいものです。



ここで、私達の自己紹介をしておきましょう。

センドンは落葉高木で、世界の温帯に広く分布します。仲間には熱帯産の木で家具に使われるマホガニーがあります。つまり、材質が硬いのです。

日本では伊豆半島以西の本州、四国、九州、沖縄などの暖かい地方に分布します。かなり昔から並木樹や庭園木として人気がありました。5〜6月に淡紫色の花を咲かせて、10月頃に黄色の果実を付けます。センドンは建築材などのほか、葉や枝は肥料、殺虫剤、虫下しにも重宝されました。有毒なので食べないほうが無難ぶなんですね。ちなみに「センドンは双葉より芳ばし」のセンドンではありません。あれは中国にある別の植物です。蘊蓄うんしやくを語る場合にご注意を。



謝辞

「清流古座川センドン物語」を製作するにあたり、清流古座川を取り戻す会、古座川漁業協同組合、古座川漁業協同組合、七川漁業協同組合、古座川町ならびに奥根公平古座川町長、広瀬征彦(故)前古座川町長、古座川町教育委員会、さらに流域住民の方々からは種々の情報と激励を頂戴しました。また、本文中の素敵な挿図はTo heartsのイラストレーター・櫻井さなえさんに、レイアウトやデザインなどについては、株式会社大伸社に大変にお世話になりました。

梅本信也